石槨外から模造品の發掘例

清 野 謙 次
豊 崎 卓

ここに報告する2例は、日本では珍しい例である。その第1は豊崎の實見例であり、第2は清野の實見例である。兩者共に模造品が古墳から發見されたのであつて、模造品の種類は異なつて居たが、其埋没状態に共通の點があるので相關連して考える必要がある。

第1例 石槨外部から發見された滑石製模造品

滑石製模造品は常總地方から發見されることが多く、當地方からも珍しい形の滑石製模造品が出る。併し茲に報告しようとする模造品は形狀としては類品を見るのであるが埋葬状態に於て頗る注意すべきものがあつた。一體滑石製模造品の多數は考古學者によつて正式に發掘されたものでないので、詳細なる發掘状態は不明である。併し確かなことは祝部土器、曲玉、管玉、刀劍等の日常使用品と雜えて石槨内或は石槨内に埋葬されて居ることである。また石製模造品だけが古墳の封土内に埋没して居ることが常總地方に少くないらしい。それは多分木棺内に遺骸と共に埋葬されたものらしいが詳細は不明である。併し以下述べる例から考えると、或は木棺の外部に木棺に接して埋葬されて居たものがあるかも知れない。これは今後考古學者の手で慎重に發掘しないと決定出来ない。

附考 滑石製模造品の製造所跡と覺しき所が常陸國の諸地方にある。これに就ては他日述べる機會もあるが、滑石の原石の産地として久慈郡の中里村入四間と大子町と磯初村とが知られて居る。

第 1 圖

第1例は常陸國新治郡高濱町郊外の舟塚山前方後圓古墳の東方に位置せる小圓墳に於て發見されたもので、發掘の詳細を豊

崎は郷土雜誌「霞浦文化」第3號に記したが左に其要點を述べる。

昭和24年2月8日高濱町北根本の本山忠彦が此圓塚の小笠拂いをして松樹を倒した時に其根本から石槨が現れた。それで蓋を持ち上げたが、棺内には遺物は無かつたと云う。豊崎は實地に就て檢分し、又本人に詳細質問して左の如き状態であつたのを知り得た。

前方後圓墳舟塚山の周りに5個の小圓墳があるが、問題の古墳は圖に於て斜線を施した直徑12米、高3米の小圓墳で舟塚山古墳の後圓部を距ること東方70米にある。そして此圓墳内に於ける石槨の位置も圖に示した如くである。舟塚山には埴輪圓筒が建て廻らされて居るが此圓塚には埴輪樹物が見當らない。石槨は小形であるが珍しい構造である。即ち圖に示した如く足とも台とも云える様な仕切りが下部に在り其中央部のものは空である。強いて類似を求めると陶棺の足を思わせるが、それとは可なり異なつて居る。用石は此地方の石槨石槨に多く使用される片岩(栗田石)であるから薄片とし易い。切込みを造り組合せである。

石棺の内部は圖に示す如く狭く、長3尺、幅1尺5寸、高5寸ほどで、成人の遺骸は納れることが出来ない廣さである。内面は朱が塗られて居る。そして内部の底には厚さ1寸位のさらさらした河砂様のものが一面に敷かれて居り、其表面に白い粒状の物が交つて居た。骨が腐朽してもろくなつて斷片になつたのかも知れない。要するに此大さの石棺腔に入れるには成熟人の遺骸では不可能に近い。洗骨を行つたのでないとすれば小兒骨であるが、日本の古墳の大多數に見る如く、人骨片は風化が進行して居るので、その點は決定し得ない。

第3 圖

古墳時代

高濱出土(石製鎌)

上總國馬津郡木更津町出土(石製)

上野國多野郡美久里村出土(鉄製)

筑前國嘉穂郡飯塚町出土(鉄製)

朝鮮半島忠清南道原州出土(鉄製)

彌生式時代

北九州筑前 大野原

同上

豊 墳

・第 4 圖

古墳の近傍では稲敷郡木原村と上總國君津郡木更津町長州塚から出た。また土浦市眞鍋臺の古墳から出た鎌を背部に帯びた埴輪土偶(前島長太郎氏所藏)の鎌は現時の鎌と異つて反部の彎曲が著しくなく、尖端部が少し鉤狀に曲り、内反りで刃を附してある。それは法隆寺所藏の鎌や、信濃國諏訪神社所藏の薙鎌に似て居るし滑石製鎌の刃に似て居る。

要するに本例は珍しい形式の石棺を發見し得た點に於て、又滑石製模造品が石棺外に於て、

第 2 圖

註 奥羽國で石器時代

の晩期に洗骨を行つて壺に骨を容れて埋葬したらしい報告例があるから洗骨を度外視出来ない。

また注意すべきことは、石棺内から遺物が發見されなかつたに拘らず、圖に示す如く滑石製模造品6個(刀子5個、鎌1個)が石棺の蓋石の下方に同一水平面に並べ置かれたことである。それは石棺の東端であつたが、石製模造品としては大形で製作も精巧であつた。刀子はすべて同一形式のものであるのでその中の最大のもを1個圖示する。鞘の側部に1個の突出あるのが餘り見ない形式であるが、稲敷郡木原村古墳からも此形式の品が出た事がある。今回發見の滑石刀子の大きさは表の如くである。滑石製鎌は

	長さ(寸)	幅(寸)	長さ 9.5 寸、幅 3.0 寸、厚さ 0.2 寸で
第1刀子	12.5	3.5	ある。圖に高濱出土としたものがそ
第2刀子	11.5	3.5	れで根本に一孔がある。上總國木更
第3刀子	10.0	3.0	津から發見された類似形式の滑石製
第4刀子	9.9	2.9	品並びに古墳發見の鐵製鎌と彌生式
第5刀子	9.0	2.7	系統の鎌の類品を比較の爲めに圖示

する。

註 石鎌は北九州の一部で若干使用されて居たことは圖の如き出土品によつて明かである。刃は内反りで形も大きく、着裝には孔の代りに基部に作られた袂込みを用いて居る。我國の農業は彌生式文化と伴つて發展し、金屬器の使用は此時代に初まるが、まだ金屬製鎌の發見を見ない。次の古墳時代に及んで鐵製農具の使用が盛んとなり、鎌を持つた埴輪土偶も出土するし、鐵鎌は上野國多野郡美久里村筑前國嘉穂郡飯塚町の古墳から、又朝鮮では平安北道渭原郡の古墳から出て居る。滑石製鎌は本

石槨に近接して埋葬された點に於て記録し置く價置がある。

第2例 石槨壁に挿入せられた木製模造刀

曾て清野は樺太島魯禮に於て多數のアイヌ墓を發掘した。その所見は清野謙次著「古代人

第 5 圖

骨の計測に基づける日本人種論」(岩波書店より昭和 24 年刊行)中に多數の圖を入れて報告した。その中には木棺だとか木劔木鋒の如き木製副葬品の腐朽せざるものが残つて居た。アイヌの木棺は日本歴史時代の石棺を偲ばせる様な型式の品であるから、日本原史時代の古墳にも多分石製模造品と共に木製模造品が使用され、其風習が

アイヌに伝えられたものであらうと想像された。アイヌの如き獨創力に乏しい民族では自種族及他種族から伝えられた古習俗は「古俗の沈澱池」として永く保存されるからである。

何分にも木製品は朽ちるので、よくよく乾燥でもして居ない限り後世に残らない。大形で分厚い木棺の一部が稀に古墳に残つて居ることがあるが、小形木製品は殆ど全部石棺石槨内で消滅して居る。ところが茲に述べる下總國結城郡大花羽村大字羽生小字前原の古墳では例外的に小形木製品が残留して居た。此古墳所在地は別稱をナツカと呼んだが、それは七ツ塚の略稱らしい。それは鬼怒川に臨んだ小高い丘地で若干の人家があり、人家の間に畑や雑木林が交つて居るが、此處彼處に數個の古墳の隆起がある。此古墳は直徑 2~3 間から數間の圓墳が多いが 1 箇所に長さ 10 間位の前方後圓墳がある。此古墳の或るものから埴輪圓筒が發見されるが、曾て埴輪土偶も出た事があつた。

これ等封土のある古墳に交つて既に封土が削平せられて、曾て石槨が出たと云われる古墳が數箇所ある。これ等を合算すると、此地の古墳は 7 個よりも遙かに多い古墳群なのである。そして大正年間に發掘された石槨 2 個も今回の發掘例に似た構造であつたし、副葬品としてはいずれも直刀を出したが、祝部土器を出さない。さて今度發掘せられた古墳の封土は既に久しい以前から削平されて殆ど平地同様になつて居て、此部に可なり太い松樹が自生して居た。此松樹が伐り倒されて、其根が掘り出された時に、地下 2 尺の所に石槨の天井石が露出した。昭和 22 年 6 月に附近の水街道町の高等女學校の歴史研究會の職員と女生徒の一團が之を發掘して蓋石 3 枚の中の 1 枚を除いた所が石槨内に人骨が横わり、直刀の横わつて居るのを見たので作業を中止して清野を呼びに來た。それで 6 月 4

第 6 圖

日の早朝から數十人立會つて靜かに蓋石を除いて人骨遺物を検査し、之を水海道女學校の標本室に運んだ。人骨と遺物とは今日も同校にある。

石 槨：古墳の封土となつて居た赤褐色の山土の下に厚さ 3 寸餘の灰白色の粘土が天井石の上を覆つて居り、更に扁平な天井石の合せ目の間にも塗り込まれて漆喰の役を務めて居た。

石槨の長軸は圖に示した如く正しく南北に在つた。そして四壁は 4 枚の平石を組み合せて造つてある。此石は雲母片岩だから薄い岩片として切り出し易いとは云いながら、左右壁は内部から測つて長さ 6 尺 6 寸、高さ 4 尺で、之が大體に於て 1 枚石から成つて居るし、前後

壁は上部に於て幅4尺、下部に於て幅4尺5寸の組み石で、これ亦大體に於て、1枚石から成て居る。此板石の厚さは南北の前後壁はやゝ薄く6~8寸、東西の左右壁はやゝ厚く8~10寸である。蓋石は3枚で略同大、幅5尺5寸前後、厚さ4~6寸。

前後左右の側壁は上記の如く4枚の大石から成つて居るが、蓋石との合せ目がピッタリ閉じられる程に正しく岩板を切れなかつたと見えて壁の上部で蓋石との間には往々にして間隙がある。これは殊に東壁の南上隅と之に對する西壁の北上隅とに於て著しかつた。前者は圖のAで示せる壁の部分である。この東壁の南上隅には内部から見ると圖に示せる如く蓋石との間に壁石に空隙がある。此空隙を2,3寸から5,6寸位の小形割石で埋めてあるが、此の詰め込み石の隙間に後記の木製短刀が置かれて居た。そして此部の石の間にも上記の漆喰様のものが使われて居たから良く乾燥して木質が保存されたのであつた。

石槨内遺物配置の大略を述べると、圖に示すが如く西壁に接して直刀が3本あつた。いずれもつか部を北に向けて居り、之に接して男性骨に副葬せられたものであろう。直刀中で此の1本は後述の飾太刀、南2本中での東の品は最長刀であつた。此直刀と男性骨の腰部、脚部の間に數本の鐵鏃が、また男性骨の左上腿部の左に數本の小形鐵釘が出た。此部に小形木箱でも置いてあつたものらしい。また鐵鏃の出た邊から胸甲の類の斷片らしい大さ數寸の鐵板が3,4片出た。鍍金環2個は可なり離れて發見された。1個は男性骨の左肩の外側、他は男性骨の胸の邊であつた。

人骨も遺物も床の上に置かれて居た。床は山土の上に2,3寸から4,5寸の割り石を不規則に敷いたもので、大部分は石槨用石の雲母片岩を小さく割つたものである。つまり石槨を造る時に用石の1部に殘餘を生じたものを碎いて床の敷石に使用したものだ。此高台地から鬼怒の本流は今日では1町足らずの近所を流れて居る。鬼怒川畔には今日でも丸い河原石が乏しいが、全然ない譯でないのに、河からの丸石が石槨の床に全然敷かれてないのは古墳時代の鬼怒の水流が今日の所在と異なつて居たのを語るものであろう。

此石槨の構造は箱式石棺と同一の、石棺と云つてもよいし、石槨と云つても差し支えない形式のもので常總地方に甚だ普遍的に見る形である。ただ此例は割合に大形であつて初めから1人用のものではなく多人數用一恐らく1家族用として築かれたものであろう。

人 骨：この石槨家族の中で最初に埋葬されたのは西側の1人體であらう。此骨は正しく仰臥して下肢を伸展し、上肢も亦伸ばして兩側前膊骨を腹上に置いて居る。50歳前後かと思われる男性骨である。位置から考えると、上記の鐵鏃、鐵鎧、金環、直刀の類は此男性に所屬して居たものであろう。また此年齢の男性骨ならば縫合の化骨も相當に進んで居るから、頭蓋骨は容易には破壊しない筈であるのに、腦頭蓋は大小幾つかの破片になつて、その位置も少々散亂して居る。(顔面頭蓋骨片を殆んど見ないのは保存不良例としては當然である。)

此第1號男性骨の頭蓋骨散亂部に横向きに第2號人骨の四肢骨がある。之は第1號屍體が腐朽した頃に天井石の1枚をまくつて次の第2號屍體を埋葬した爲めに第1號頭蓋骨が破損したと思う可きである。此石槨の東北部には大腿骨、脛骨などの數から考え、又齒の性状等から判斷して、更に少くも2體分の人骨が散亂して居る。これは第1號骨の如く正しく仰臥伸展して居らず、不規則に多少座位を取らせたか、或は多少屈した状態である。第1號人骨を埋葬した後に、何年かを距てて北の蓋石を開いて逐次に埋葬を行つたので、こんな無理な埋葬位置が出来たのだ。第2號骨は小からの老婆であつて、之が上記の如く第1號の頭部の

上に横向きに置いてある。第1號骨の妻が後年死して埋葬されたのかも知れない。第3號とも云うべき骨は男であつて、これ亦 50 歳近い。その他性別、年齢不詳の甚だしく保存不良の成年者の骨が少くとも1例ある。

副葬品：直刀は3本出た。その中の2本を圖に示す。其1本は飾太刀で、總長2尺2寸、鏢は朽失して居る。つかに目貫の孔一つ。銅製鏢と銀製鏢とが鯉口に施されて、次に薄い鐵

第 7 圖

板に銀覆輪の飾板が巻いてある。此飾板には此時代に多く見る圓形の打出し文がある。その次に紐通しの鏢が2個はめてあるが、いずれも銅製鍍金で、鍍色が美しい。

また此部分には鞘の木質が残つて

居る。古く其面には漆が塗つてあつたので、薄い膜となつて剝離する。此膜の色は樂浪の漆器の或ものに見る如く薄鼠色である。しかし之は原色では無くして褪色したものであろう。木鞘は大部分朽失して居るが、尻に近く残つて居り、此部には金銅鏢と銀覆輪飾板とがある。他の2本は無飾の直刀で、1本は總長3尺、1本は2尺8寸5分、2本共に鐵製鏢と鐵製ハバキが嵌められて似て居るから短い方の直刀を圖示する。鐵鏢は寶球形で8個の透しがある。此時代としては普通の形式の直刀である。

胸甲らしい數個の鐵板は不完全で破損が甚だしい。鐵釘長さ1寸5分ほどのものが數本出た。鐵鏢としては平凡で簡単な形式のものが4個出た。長さ 2.2~3.9 寸。

銅台に金の薄板を着せた美しい金色の金環一對は各直徑8分。断面は僅かに橢圓形である。棗玉高さ4分のものが1個あつた。僅かに赤色を帯び、灰白色不透明。石にしては少し軽い琥珀でもない。質は判斷出来ない。

第8圖

木製刀：この珍しい品が珍しい所から發見されたので、此古墳は報告する價值が生じた。上記の如く他の副葬品が石槨の底部から人骨に交つて發見されたのと全然異なつて、石槨壁の東南隅の岩壁の隙間に置かれてあつたのだ。それは普通の副葬品とは異つたものであるのを物語つて居る。木刀は大部分は朽ちて居るが柄頭の部分だけは朽ちずに取り出せた。それは圖に縮寫したが、現行部長1寸8分、幅1寸弱で、黒く描いたのは鍍金した薄銅板で造つた金具で青く錆びて居る。それが断面に示す如く柄頭の紐通しの穴にはめこまれて居り、又環狀に柄部を取り巻いて居る。この金銅帶の上部、紐通し穴の周圍一帶の木質には漆が塗つてあつた。それは膜狀を成して剝れるほど厚い漆膜でない。褪色しては居るが黒漆では無かつたかと思う。鍍金銅帶の下部は麻絲かと思われる様な細纖維を幅1分5厘位の束としてびつとり螺旋狀に卷いた上に漆が塗つてある。濕つて居る内には之がよく分つた。漆色は赤褐色であるが乾燥するに従つて剝離した。

第 9 圖

要するに此品は紐通し穴ある木刀の柄頭部である。掘り取つた場所の殘存腐朽部を検すると刀身に鐵は無かつたし、又竹みつ式の木刀でもなかつた。鞘と柄と連續したまま1本で造つた模造刀であつた。そして全長は岩壁の空隙の長さから考えても1尺内外であるが、全體

としての木刀の形式は腐朽の爲めに遺憾ながら分らない。

アイヌは日本原史時代の習俗をも多量に傳承して居る。それは前記の滑石製刀子の系統の紐小刀（マキリ）もあるし熊祭には1木製の模造木刀を使用して居る。此處に發見した短い木製刀は柄頭の形から考えると模造木刀だと思えるが、マキリ形刀子の1木製模造であつたのかも知れない。何分にも大部分が朽ち果てて居るので判斷に遺憾な點が多い。

結 語

模造品を副葬するのは節約の爲めであるのは否めない。滑石製品が古墳時代のものとして多く残存して居る。木製品も之と同時に行われたのは今日のアイヌの爲す所によつて推測出来るが、上記の木製刀が古墳から發見されたので一層これが確かめられる。いずれにしてもこれら模造品を日用品と共に、又は模造品のみを副葬することによつて費用が節約出来るのだから、此習俗は厚葬が廢れて來た時代に多く行われたのは推測出来る。

ところが模造品の或物は節約副葬品とは考へ難い場所に置かれて居る。上記の第1例では滑石製刀子の類が石棺外部の東北隅に並べ置かれて居たし、第2例では石槨の東南隅壁の空隙に木製刀が置いてあつた。これはいずれも明器としての副葬とは考へ難い。さればと云つて普通の意味での祭祀用としては其位置に於て、其量に於て、又品物の種類に於て理解し難い。強いて推測すれば後世の魔解けに似た所がある。刀劔の類を使用して居るのがそれであるが、まだ顚例の發見が少くて根據が乏しい。方位は東であるが、東南と東北とでは一致とは云えまい。後年顚例の發見が増加するを俟つて此意味を決すべきである。

Stone and Wooden Imitations of Metal Implements found outside Coffins in Ancient Tombs

KENJI KIYONO
TAKU TOYOSAKI

Authors describe two examples of imitations found outside the coffins in ancient tombs of Japan: 1. a group of stone (soapstone) implements consisting of five knives and a sickle, discovered laid side by side below the eastern end of the lid of a stone coffin, (Fig. 1, 2), 2. a wooden sword inserted into the crevice of a stone coffin (Fig. 6). The former was found at Hitachi, the latter at Shimōsa, both in Kanto district of Japan.

It is very common with ancient tombs to have various kinds of implements laid beside the dead. And above mentioned imitations of stone and wood are naturally thought to have been buried instead of metal implements for saving. But it is the first occurrence that they were found outside the coffin. They may have been used as amulet, but we will suspend any conclusion till more examples are found.